

原正行教授を送る

本学経済学部の創立以来の教員スタッフであった原正行先生は、2014年の3月末、本学部第1期生の卒業を見届けて、このキャンパスを去られる。原先生は、1944年に大阪府で生まれ、1967年3月大阪大学経済学部を卒業後、短期間住友銀行に勤務されたあと母校の大学院に進学して国際経済学を専攻された。1972年に大阪大学経済学部助手、1976年同講師、1978年同助教授となったあと、1989年に神戸大学経済学部に教授として迎えられた。神戸大学の学部・大学院でほぼ20年講壇に立たれ、2008年3月に定年退職され、同大学の名誉教授になられた。本学が特任教授として先生をお迎えしたのは、その2年後であった。

原先生の御専門は国際投資および国際地域統合論であり、『海外直接投資と日本経済—投資摩擦を越えて—』（有斐閣、1991年）、『地球化時代の日本経済—企業の国際化の視点から—』（文眞堂、2001年）等の著書と和文・英文の多数の論文を公表されている。日本企業の直接投資や国際化にいちやく注目し、学界をリードする業績を残され、日本国際経済学会の理事および常任理事に何期にもわたって選出されている。

本学では、「基礎演習」「専門演習」のほか、「国際経済論」「国際投資論」「地域統合論」「国際金融論」などの講義を担当された。学部が創設された最初の年度には、着任したばかりの教員が、これまた高校を出たばかりの新入生を相手に、できるだけかみくだいた入門的な授業をしなければならなかった。どのくらいのレベルで授業を行うのが適当なのか、私を含めて多くの教員が迷ったのではないかと思う。この初年度のシラバスを見ると、第1学年に配当されている「国際経済論」の授業については、原先生も相当にご苦心されていたように思えた。創設後2年目・3年目になると専門的な講義も始まり、本学部の学生たちに国際経済についての専門的な理論と知識を御与えいただいた。本学部で学生に選ばせる専攻は「地域経済」と「観光経済」の二つであったが、どちらの領域の活動についても、国際経済的な視点を欠いては、その現代的な展開を理解できないからである。それでも、「国際経済」を専攻として独立させてカリキュラムを整備することはしていなかったのも、先生のご学殖を十分に活かせなかったのではないかと怖れている。

先生はまた、新設学部の教員の研究心の証である本誌の編集委員長としてその創刊に心を砕かれた。その創刊号には、自ら筆を執って東アジア共同体構想をめぐる論考を掲載された。実は私もこの創刊号に、本学着任前のメキシコ滞在のレポートとして、専門外ながらメキシコの国境経済とNAFTAについての論考を掲載してもらった。「研究ノート」として提出した原稿だったので査読ではなかったが、提出原稿を読んでくださったのは原先生だった。先生は私に、「面白かったよ」と言ってくださった。原先生にとって「面白い」というのはどういう意味であったのか謎も残るが、何はともあれ、経済統合の専門家にお墨付きをもらったように感じて嬉しくなったことを思い出す。

学部創立以来4年間、先生は同僚の教員スタッフに対していつも最も優しい気持ちを持ち続けられた方で、その気持ちを私にさりげなく伝えられた。教員スタッフの最長老とい

うだけでなく、ことばどおりのジェントルマンというに最もふさわしい方であった。先生をお送りすることはまことに寂しいことであるが、先生の今後のご健康をお祈りして送る言葉に替える。

経済学部長

八木紀一郎